

青年期から成人期にかけての執着的態度と 退却的態度の関係について

The Relationship Between Adherence and Withdrawal from Adolescence to Adulthood

荒井 真太郎*

Shintaro ARAI

抄 録

本研究では、パーソナリティの発達に関して、同一性形成をめぐる生じる執着的態度と退却的態度という対極的な態度のあり方に着目した。青年期と成人期を対象とした調査により、それらの態度のあり方を比較検討し、青年期と成人期の心性の一側面を捉えることを試みた。また、執着的態度と退却的態度の意味を明らかにするため、両者と自己イメージとの関連について分析を行ない、その結果青年期と成人期とでは退却的態度の意味が異なるということがいくつかの点で示唆された。これらの結果は、青年期から成人期にかけてのパーソナリティの発達の一側面を明らかにする際、執着的態度と退却的態度という視点を取り入れることの有効性を示唆するものであった。

1. 問 題

Levinson (1978)¹⁾は、二十代の青年期から成人期にかけての時期において同一性を模索し選択する過程で、成人として生きてゆく社会の中で実現可能な夢を持つことが重要な役割を果たすことを述べている。これは換言すれば、青年期以降に、成人として生きる社会において実現可能な夢を保持できるかどうか、という緊張状態が生じることである。つまり、外的現実の中で夢や願望を実現させようとする方向の力と、逆に夢や願望の実現を諦めようとする方向の力による緊張が生じると考えられる。荒井 (1998)²⁾は、大学生や社会人を対象として、前者の場合の意識・行動レベルでの表れを執着的態度、後者の場合の表れを退却的態度として、TATに表現される現実と願望の折り合いの付け方との関連から、構成概念妥当性について検討した。

この執着的態度と退却的態度という見方は精神病理学における知見を参考としている。飯田 (1983)³⁾

* 関西国際大学人間学部

は、うつ病者の病前性格とされている執着性格（下田，1941⁴⁾；平沢，1966⁵⁾）の発達史について次のように述べている。自立をめぐって思春期ないし青年期の危機が生起し，それを克服するための心的機制として几帳面，勤勉，仕事熱心，良心的といった執着性格が顕在化するが，この心的機制が破綻する結果としてうつ病が発病する，という見方である。飯田は執着性格者のように真面目で一生懸命に物事に取り組もうとする人が却ってうつ病に陥ることがあるということから，青年期における危機に際して，物事に傾倒する態度が高まることの意味を慎重に考慮すべきであると示唆している。酒井（1987）⁶⁾は，うつ病者が物事に取り組む際の頑張り方は度外れなところがあり，彼らの意識には「やればできる」というように行為することによって自分の願望が叶えられるという全能感があることを指摘している。この態度は，笠原（1976）⁷⁾の言う，執着性格者の特徴である強迫性に関連づけられる。しかし，執着性格者の几帳面，勤勉，仕事熱心といった態度は社会的役割によく適応しようとする態度でもある。そこで本稿では執着性格者の，①社会的な役割への適応を強く指向していること，②強迫性に関わっていること，という二つの特徴的な態度を執着的態度として問題にすることとする。

危機に直面して，同一性拡散状態における選択の回避・麻痺，勤勉さの拡散のように執着的な態度とは逆に社会的な役割に自己投入することから遠ざかろうとする態度も生じる。これは，精神病理学の領域ではステューデント・アパシー，或いは退却神経症（笠原，1978）⁸⁾として知られている病態に顕著に表れる。佐藤（1987）⁹⁾は，本業である仕事や勉強に対して限局的に意欲を失い無気力な状態像が顕在化するという特徴を示す逃避型抑うつや退却神経症の症例の発達史について Levinson や Winnicottの理論を基にして考察し，社会的現実の中で実現可能な夢を保持するという二十代から三十代にかけての成人の発達課題を巡って，逃避的態度やアパシー状態が生じるのではないかという見方をしている。また広瀬（1977）¹⁰⁾は，逃避型抑うつやアパシー型神経症について競争社会という現実と直面した時に生じる反応として捉えられる側面があることを次のように指摘している。つまり，競争社会の戦いにおいて，戦いの前から無気力になるのがアパシー型神経症で，戦いに参加しながら形成不利と見るや簡単に戦いを諦めて抑うつに逃避するのが逃避型抑うつである，というのである。笠原（1988）¹¹⁾は，退却神経症において，不安や葛藤の存在が曖昧なままで，意欲が湧きにくい，無気力であるなどの症状が現れることについて，回避機制が用いられるためであると指摘している。以上から，逃避型抑うつ，退却神経症において表れる態度の特徴は次のようにまとめられるだろう。つまり，①無気力，同一性拡散などアパシー性に関わる次元と，②逃避的，退却的など回避性に関わる次元である。本稿ではこれらの次元で表される態度を退却的態度として問題にする。

本研究では，夢や願望を実現しようとするあり方と，諦めようとするあり方という対極的な次元に着目して，それらに対応する執着的態度と退却的態度という側面から，青年期以降のパーソナリティの発達について捉えようとする。Levinson¹²⁾は，成人社会において夢や願望を実現しようとする事に関連して，成人期初期の発達課題として，取捨選択の余地を最大限に残しながら大人の生活への可能性を模索することと，それと対照的により責任を持ち安定した生活構造を作ることの二つを挙げており，両者のバランスを取ることは難しい問題であると述べている。執着的態度と退却的態度は，「大人の生活への可能性を模索すること」に関わる態度であると言えるが，青年期には成人期よりも，大人としての現実生活の実体験がない分，それらの態度はより葛藤を起こしやすく，極端な形で表れる傾

向があるだろう。また、青年と成人ではこのような点で置かれている心的状況が異なるため、青年と成人のそれぞれにとって、執着的態度、退却的態度の意味が異なると予想される。

青年期は、生物的、心理的、社会的に子どもから大人へ移行する時期で自己像が再構成されると言われている (Ausbel, Montemayor & Svojiar, 1977¹³⁾)。そのため自己像と執着的態度、退却的態度との関連を検討することにより、青年期から成人期への移行におけるそれぞれの態度の意味を総合的に捉えることが可能になると考えられる。また、青年期には、大人としての社会生活を想像する中で執着的態度や退却的態度が表れることになり、自己像に対してそれらの態度の持つ意味は、青年期と成人期では異なることが予想される。そこで、本研究では、青年期と成人期における両態度の意味を自己イメージとの関連の仕方から検討する。

本研究の目的は次の通りである。①執着的態度と退却的態度のあり方とそれらの構造を捉え、両態度尺度の妥当性について確認する。但し、両尺度とも精神科臨床における直観的な記述に基づいているため、心理学的な構成概念としてのモデルを探索的に検討する意味がある。②執着的態度と退却的態度の自己イメージとの関連を検討する。③①、②を通じて青年期と成人期におけるあり方を比較することでライフサイクルにおける青年期から成人期への移行に関わる執着的態度と退却的態度の心理学的意味を検討する。

2. 方 法

2. 1 調査対象

青年群は国立 A 大学の大学生 89 名、専門学校生 7 名。(男性 51 名、女性 45 名。平均年齢 19.2 歳、年齢範囲 18 歳～22 歳。) 成人群は地方公務員、会社員、高校教員、自営業者、主婦の 103 名。(男性 49 名、女性 54 名。平均年齢 35.9 歳、年齢範囲 25 歳～46 歳。) 成人群のうち、91 名については、国立 A 大学の卒業生名簿より年齢範囲を考慮しながらランダムに選択して郵送にて依頼したものである。全配布数のうち有効回収率は 46% であった。成人群の残りの 12 名については、筆者が個人的に依頼し回答の得られたもので、最終学歴は高校卒、大学卒の両方が含まれる。

2. 2 測定尺度

①執着的態度測定尺度と退却的態度測定尺度：荒井¹⁴⁾の作成した執着スタイル質問紙より尺度項目を選定した。荒井は、執着性格、逃避型抑うつ、退却神経症において特徴的であるとされる態度を中心に項目を収集して、執着スタイル質問紙を作成しており、その結果、執着的態度に関わる 2 つの下位領域が互いに高い相関関係にあること、退却的態度に関わる 2 つの下位領域においても同様であることが確認されている。従って本稿では、執着的態度と退却的態度をそれぞれ独立した概念として尺度化することを試みる。

項目の内容的妥当性を検討するため、心理学専攻の大学院生 3 名に意見を求めた。その結果、執着

的態度に関わる 19 項目と退却的態度に関わる 20 項目が尺度項目として選定された。執着的態度尺度は、「どんなときでも自分の役割をきちんと果たしたい」など、社会的役割への適応を強く目指そうとする態度を示す項目（10 項目）と、「物事を徹底的にやらないと気が済まなくなる」など強迫性を示す項目（9 項目）から構成されている。また、退却的態度尺度は、「やらなければならないことなのに、やる気がでなくなる」など、アパシー状態を表す項目（16 項目）と、「物事に、のめりこまないようにしている」など回避性を表す項目（4 項目）から構成されている。各項目につき「全くそうである」、「ややそうである」、「どちらともいえない」、「ややそうでない」、「全くそうでない」の 5 件法で回答を求めた。

②自己イメージの測定：大石（1974）¹⁵⁾を参考として、20 対の形容詞対を選定し、それらを尺度項目とする自己イメージに関する SD 法尺度を作成した。20 対の形容詞対は、ポジティブーネガティブという評価性だけでなく、活動性や力量性という次元に関わる項目も含まれている。それぞれ「とても」、「かなり」、「やや」、「どちらともいえない」、「やや」、「かなり」、「とても」の 7 件法により回答を求めた。

2. 3 手続き

大学生については大学での講義中に質問紙を配布し、集団で実施した。専門学校生、社会人等に関しては、調査者が郵送にて質問紙への回答を直接に依頼し、郵送によって回答を得た。調査時期は、1996 年 10 月から 11 月にかけてである。

3. 結 果

3. 1 執着的態度測定尺度、退却的態度測定尺度の項目分析及び概念構造の検討

執着的態度尺度、退却的態度尺度の項目ともに、自分の態度がそれらに該当すると思うほど得点が高くなるように、各項目につき 5 点～1 点を与えた。項目分析のため執着的態度尺度の 19 項目の総得点を求め、被調査者をその総得点の中央値により上位群と下位群に分けた。尺度を構成する 19 個全ての項目得点に関して、それぞれの得点分布に正規性が明らかではなかったのでノンパラメトリックの U 検定により G-P 分析を行った。その結果、執着的態度尺度の全 19 項目で 1%水準の有意な群間差が認められた。退却的態度尺度においても同様の手続きで分析したところ、1 項目を除く 19 項目で 1%水準の有意な群間差が認められたため、その 1 項目を除外した。従って両尺度とも 19 項目に弁別力があることが示された。

執着的態度尺度 19 項目と退却的態度尺度 19 項目の内的構造を明らかにするため、因子分析をそれぞれについて行った（主因子法－プロマックス斜交回転）。固有値の大きさと因子の解釈のしやすさを考慮して、両尺度とも 2 因子ずつを抽出した（表 1, 2）。複数の因子に高い負荷をした項目とどの因子にも、.45 以上負荷しなかった項目を除外して、残った項目を尺度項目として採用した結果、執着的態

表1 執着的態度尺度の因子分析結果（プロマックス回転後）

質 問 項 目		因子1	因子2	共通性
〈強迫性尺度項目〉	細かいことがいちいち気になってしまう。	.711	-.101	.551
	物事を徹底的にやらないと気がすまなくなる。	.670	.001	.542
	一つのことを、長いあいだ気になる。	.644	-.159	.429
	自分は完璧主義者であると思う。	.616	.071	.509
	自分のやることが、思い通りにならないと我慢できない。	.590	-.261	.349
	いったん物事をやり始めると、中途はんばにできない。	.555	.267	.606
	ついつい頑張りすぎて疲れきってしまう。	.501	.025	.317
	適当にごまかすことができない。	.489	.206	.442
	きちょうめんで、物事を整理するのが好きだ。	.459	.088	.304
〈役割指向性尺度項目〉	どんな仕事であっても、きちんとやりとげたい。	-.178	.715	.529
	やらなければならないことは、まじめにやる。	-.048	.704	.569
	どんな時でも、自分の役割をきちんと果たしたい。	-.035	.682	.540
	仕事などをさぼったり、ずぼらにすることはきらいだ。	.150	.614	.575
	たいていのことは、適当に済ませておけばよい。(※)	-.128	-.520	.413
	自分で決めたことには、絶対に責任を持つ。	-.103	.515	.280
	何に対しても、一生けんめいに取り組みたい。	.147	.450	.337
〈削除項目〉	自分の責任を強く感じてしまう。	.424	.269	.419
	仕事などを頼まれると、何でも引き受けてしまう。	-.092	.399	.166
	他人との約束は、絶対に守る。	.105	.322	.172
固有値	5.81	2.23		
寄与率 (%)	30.6	11.7		

(※) 逆転項目

表2 退却的態度尺度の因子分析結果（プロマックス回転後）

質 問 項 目		因子1	因子2	共通性
〈アパシー尺度項目〉	やらなければならないことなのに、やる気が出なくなる。	.626	-.070	.616
	何をするのも面倒くさくなる。	.560	-.052	.506
	無気力になることが多い。	.554	.001	.560
	仕事や勉強をする意欲が湧きにくい。	.483	.158	.657
	自分が何者なのかわからなくなることがある。	.547	-.097	.432
	自分の仕事や勉強のことになると、おっくうになる。	.585	.152	.517
	自分のやっている仕事や勉強の意味がわからない。	.450	.047	.425
	全てを捨てて、どこかへ逃げたくなる。	.452	-.024	.347
	さっさと行動するのが苦手である。	.505	-.139	.328
	追いつめられるまで、やる気が起きないことが多い。	.513	-.254	.278
〈回避性尺度項目〉	ストレスになることは、たいてい避けるようにする。	-.304	.605	.385
	物事に、のめりこまないようにしている。	-.218	.640	.491
	失敗しそうなことにエネルギーを使いたくない。	-.214	.595	.417
	自分はあきらめやすい性格だ。	.001	.498	.450
	必死になって、物事に取り組むことができない。	.085	.450	.453
〈削除項目〉	たいていのことは自分の思うようにならないものだ。	.386	.120	.410
	自分のしていることが、むなししいことのように思える。	.354	.160	.412
	仕事や勉強などを一生懸命にできない。	.229	.249	.348
	まじめに努力しても仕方がないことが多い。	.112	.342	.330
固有値	6.72	1.64		
寄与率 (%)	35.4	8.60		

度尺度は計16項目、退却的態度尺度は計15項目となった。執着的態度尺度の因子1は、「細かいことがいちいち気になってしまう」、「物事を徹底的にやらないと気がすまなくなる」など強迫性に関わる項目に高い負荷を示したため「強迫性因子」とし、因子2は「どんな仕事であっても、きちんとやりとげたい」、「やらなければならないことは、まじめにやる」など、与えられた仕事や役割を全うしようとする態度に関わる項目に高い負荷を示したため「役割指向性因子」とした。この結果、下位尺度の強迫性尺度として9項目、役割指向尺度として7項目を選び、それぞれの総得点を下位尺度得点とした。執着的態度尺度の α 係数を求めたところ、全体としては.86、強迫性尺度は.83、役割指向性尺度は.81であったため、それぞれ十分に高い信頼性が認められた。また、退却的態度尺度の因子1は「やらなければならないことなのに、やる気が出なくなる」、「何をするのも面倒くさくなる」などアパシー状態に関わる項目に高い負荷を示したため「アパシー因子」とし、因子2は「ストレスになることは、たいてい避けるようにする」、「物事に、のめりこまないようにしている」などコミットメントを避ける態度に高い負荷を示したため「回避性因子」とした。下位尺度のアパシー尺度として10項目、回避性尺度として5項目を選び、それぞれの総得点を下位尺度得点とした。退却的態度尺度の α 係数を求めたところ全体としては.86、下位尺度のアパシー尺度は.86、回避性尺度は.69であったため、それぞれについて十分な高さの信頼性が認められた。

青年群と成人群における執着的態度と退却的態度のあり方を検討するために、両群の各下位尺度得点の平均を比較したところ（表3）、退却的態度及びアパシー尺度得点において青年群の方が成人群よりも有意に得点が高かった（ $t = 4.08, df = 197, p < .001$; $t = 5.04, df = 197, p < .001$ ）。次に、両尺度間の相関係数を青年群と成人群ごとに算出した（表4）。青年群においては、執着的態度と退却的態度の有意な負の相関関係があったのに対し、成人群においては両者の相関関係は有意でなかった。下位尺度同士の相関関係に関して、青年群と成人群に顕著な差は見られなかった。

表3 執着的態度と退却的態度における青年群と成人群の比較

	青年 平均(標準偏差)	成人 平均(標準偏差)	t値
執着的態度	55.49(10.18)	55.16(9.36)	.21
強迫性	29.63(6.97)	28.69(6.47)	.99
役割指向性	25.82(5.06)	26.47(4.38)	-.99
退却的態度	43.13(10.77)	37.35(8.15)	4.32***
アパシー	30.04(8.10)	24.37(6.41)	5.54***
回避性	13.09(3.80)	12.98(3.27)	.22

*** $p < .001$

表4 青年群、成人群別の執着的態度と退却的態度の相関係数

	青年	成人
執着的態度-退却的態度	-.240*	-.104
強迫-役割指向	.417***	.467***
強迫-アパシー	.068	.192
強迫-回避	-.200*	-.117
役割-アパシー	-.426***	-.328**
役割-回避	-.386***	-.292**
アパシー-回避	.585***	.347***

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

3. 2 自己イメージとの関連

自己イメージのSD法尺度の内的構造を明らかにするために因子分析を行った（主因子法-バリマッ

クス回転)。固有値の大きさの変化と解釈のしやすさを考慮して4因子を抽出した(表5)。因子1は、「にぎやかな-静かな」、「明るい-暗い」、「愉快的-不愉快的」の項目に高い負荷を示したため気分的快因子とし、因子2は「するどい-にぶい」、「深い-浅い」、「大きい-小さい」の項目に高い負荷を示したため力量性因子とし、因子3は「豊かな-貧しい」、「安定した-不安定な」、「清潔な-不潔な」の項目に高い負荷を示したため安定性因子とし、因子4は「きびしい-やさしい」、「かたい-やわらかい」の項目に高い負荷を示したため厳格性因子とした。複数の因子に高い負荷をしている項目と、どの因子にも.45以上の負荷を示さなかった項目を除外し、残りの項目を自己イメージの4つの側面を表す下位尺度項目とした。気分的快を示す項目は5項目、力量性を示す項目は6項目、安定性を示す項目は5項目、厳格性を示す項目は2項目とし、それぞれの総得点を下位尺度得点とした。

表5 SD法による自己イメージの因子分析結果(バリマックス回転後)

	項 目	因子1	因子2	因子3	因子4	共通性
〈気分的快〉	愉快的-不愉快的	.782	.206	-.235	-.100	.719
	にぎやかな-静かな	.782	.136	.140	-.022	.651
	明るい-暗い	.774	.113	-.090	.016	.620
	楽しい-苦しい	.714	.012	-.426	-.157	.717
	軽い-重い	.479	-.319	.025	-.222	.381
〈力量性〉	するどい-にぶい	.035	.735	-.088	.151	.573
	大きい-小さい	.309	.665	-.229	-.075	.596
	深い-浅い	-.297	.658	-.049	.169	.552
	永遠な-一時的な	.188	.566	.051	-.180	.391
	強い-弱い	.383	.574	-.288	.207	.602
	美しい-みにくい	.132	.554	-.303	-.113	.429
〈安定性〉	豊かな-貧しい	-.032	-.034	-.717	.195	.554
	安定した-不安定な	.328	.142	-.649	.001	.549
	あたたかい-冷たい	.141	.147	-.555	-.370	.492
	清潔な-不潔な	-.043	.329	-.529	-.092	.398
	良い-悪い	.391	.337	-.499	-.185	.550
〈厳格性〉	きびしい-やさしい	.102	.060	.068	.855	.749
	かたい-やわらかい	-.307	-.001	-.021	.649	.516
〈削除項目〉	うれしい-悲しい	.598	.102	-.464	.029	.584
	好き-きらい	.472	.441	-.376	-.179	.592
	固有値	5.98	2.46	1.48	1.30	
	寄与率 (%)	29.9	12.3	7.40	6.50	

執着的態度尺度と自己イメージとの関連を検討するため、執着的態度尺度の得点の中央値を基準として得点の高い群と低い群に分け、執着的態度の(高群-低群)と発達段階(青年群-成人群)の4群による自己イメージの各側面の下位尺度得点の平均を比較した(表6)。執着的態度と発達段階の2要因による分散分析を行ったところ、気分的快と厳格性において執着的態度の主効果が見られ($F(1,198) = 5.34, p < .05$; $F(1,198) = 6.91, p < .01$)、執着的態度の高群は低群よりも気分的快尺

度得点が低く、また厳格性尺度得点が高いことが明らかになった。

力量性と安定性においては発達段階の主効果が見られ ($F(1,198) = 22.28, p < .001$; $F(1,198) = 15.20, p < .001$), それぞれ成人群の方が青年群よりも下位尺度得点が高かった。

退却的態度尺度についても同様の分析を行った (表7)。力量性及び厳格性においては、退却的態度と発達段階との交互作用が有意であった ($F(1,198) = 5.78, p < .05$; $F(1,198) = 4.72, p < .05$)。下位検定の結果、青年群、成人群とも退却的態度得点の高群は低群より力量性得点は低かったが、高群と低群間の力量性得点の差が、青年群の方が成人群よりも大きい傾向が認められた。また、青年群では退却的態度の高群の方が低群よりも厳格性得点が低い傾向があるのに対し、成人群では逆に高群の方が低群よりも厳格性得点が高い傾向が見られた。退却的態度の主効果は、気分的快、安定性において認められた ($F(1,198) = 14.08, p < .001$; $F(1,198) = 17.28, p < .001$)。退却的態度の高群は低群よりも、気分的快、安定性の尺度得点において、ともに低い得点であることが明らかであった。

執着的態度と退却的態度の両尺度と自己イメージの4側面との関わり方をさらに相関分析を行うことにより検討した (表8)。気分的快は、両態度に対してともに有意な負の相関を示しており、その傾向は特に成人群における退却的態度との関わりに顕著であった。力量性と安定性は、青年群、成人群ともに退却的態度に対して有意な負の相関を示した。厳格性は、青年群、成人群ともに執着的態度との有意な正の相関が示された。

表6 自己イメージの各側面における平均と標準偏差 (執着的態度の高低と発達段階別)

執着的態度	青年群		成人群	
	高	低	高	低
気分的快	20.64	21.69	20.33	22.42
	5.24	4.29	5.52	3.51
力量性	22.42	22.02	25.50	25.26
	5.84	4.29	4.66	4.00
安定性	20.38	20.71	22.85	22.56
	3.85	3.57	4.38	3.84
厳格性	8.18	7.35	8.56	7.84
	2.24	1.67	2.49	1.78

※上段が平均、下段が標準偏差

表7 自己イメージの各側面における平均と標準偏差 (退却的態度の高低と発達段階別)

退却的態度	青年群		成人群	
	高	低	高	低
気分的快	20.41	22.23	19.38	22.56
	5.23	3.93	4.63	4.44
力量性	19.91	25.58	23.70	26.44
	3.71	4.83	4.38	4.00
安定性	19.50	22.05	21.50	23.47
	3.68	3.22	3.82	4.14
厳格性	7.47	8.23	8.55	8.00
	1.85	2.18	1.93	2.33

※上段が平均、下段が標準偏差

表8 執着的態度、退却的態度と自己イメージの各下位尺度得点との相関係数

	執着		退却	
	青年	成人	青年	成人
気分的快	-.20*	-.21*	-.25*	-.47***
力量性	.17	.16	-.49***	-.38**
安定性	-.07	.04	-.43***	-.41**
厳格性	.32**	.24*	-.09	.12

4. 考 察

4. 1 執着的態度尺度と退却的態度尺度について

執着的態度尺度と退却的態度尺度の下位尺度間の相関関係においては、青年群と成人群に顕著な差は見られず、両群ともに共通する特徴が表れた。執着的態度の下位尺度同士、退却的態度の下位尺度同士の正の相関はともに高く、それぞれの態度尺度の因子的妥当性が確認された。一方、役割指向性とアパシー間、役割指向性と回避性間の負の相関の大きさに比べ、強迫性とアパシー間、強迫性と回避性間の相関は大きくなかった。従って、執着的態度のうち役割指向性の次元については、退却的態度と対極的であることが明らかであるが、強迫性の次元についてはそうでないと考える必要がある。本稿では執着的態度と退却的態度を、概念上で対極に位置づけているが、強迫性をめぐって、尺度の構成概念についての問題が明らかになった。強迫性は退却的態度との有意な相関関係は認められなかったが、笠原¹⁶⁾のように、アパシーの背景には強迫パーソナリティがあるという見方があり、今回の結果からただちに強迫性と退却的態度が無関係であるとは言い切れない。従って強迫性と退却的態度の概念上の関係をモデル化すること、そしてそのモデル化に従って構成概念妥当性の検証を行うことが必要である。

青年群と成人群を対象として、執着的態度尺度と退却的態度尺度によって測定された結果から次のことが明らかになった。青年群では、執着的態度と退却的態度の間に有意な負の相関があるが、成人群では同じく負の相関を示しながらも青年群のように顕著ではなかった。本稿では、執着的態度を「何事にも一生懸命取り組みたい」など社会的役割への指向性と「徹底的にやらないと気が済まない」などの強迫性から捉えており、一方の退却的態度を「勉強や仕事に意欲が湧かない」などのアパシー性と「ストレスになることは避ける」などの回避性から捉えている。執着的態度と退却的態度は夢や願望を実現させようとするあり方に関して正反対の態度であるが、両者の関係は青年期と成人期とで異なるという可能性が示唆された。Maslow (1954)¹⁷⁾によれば、成熟した人格には相補的な特性の共存を意味する両極性の弁証法的融合が求められるとされている。青年期においては、両者は対照的な態度として個人のうちに共存しづらいつものであるが、成人期になるとそれらは互いに相容れないものではなくてくると考えられる。但し、青年期における両者の負の相関は有意とはいえそれ程大きくないため、両者が個人内に共存することの意味について細かく検討してゆくことが必要である。

執着的態度尺度と退却的態度尺度の下位尺度ごとに青年群と成人群を比較した結果、退却的態度尺度のアパシー尺度においてのみ、青年群の方が有意に高得点であることが明らかになった。この結果は、青年期におけるアパシー心性の高さが特殊なものでなく、青年一般に体験されやすいことを示唆している。笠原¹⁸⁾はステューデントアパシーの概念を提唱し、病理的な問題としてアパシー状態を記述しているが、アパシー心性は青年期に特徴的なものであると言えよう。笠原が取り上げたのは、留年学生のように長期にわたってアパシー状態から抜け出せないでいる青年達であるが、それに対し一般学生は、アパシー状態に陥っても何らかの形で治まってゆくと考えられる。また、役割指向性、強迫性、回避性については青年群と成人群に差が見られなかったため、これらは青年期から成人期への移行によってアパシーほど顕著に変化する心性ではないと考えられる。

4. 2 自己イメージとの関連、および青年期から成人期への移行の問題

執着的態度、退却的態度の自己イメージとの関連の仕方について、青年期と成人期で共通して見られた傾向について先に述べる。執着的態度は不快な気分や厳格な自己イメージと関わる傾向が示された。厳格さは、大切なことに真剣に取り組む時に伴うものであり、そのことが執着的態度として表れることは肯けるが、それと同時に不快な気分と関連するものである。一方、退却的態度は自己イメージに関する力量性の小ささ、また不安定さと関わる傾向を示した。発達段階に関わらず、退却的態度は全般的にネガティブな自己イメージと関わっていると言えよう。

次に、青年期と成人期で異なる傾向を示したものについて述べる。自己イメージの力量性及び厳格さに関して、退却的態度と発達段階（青年群－成人群）の交互作用が見出された。力量性の交互作用については、青年群における退却的態度の高群の力量性得点の低さが際立っていることによると考えられる。また、厳格性の交互作用については、退却的態度の高群と低群による厳格性得点のあり方が、青年群と成人群とでは逆になる傾向が認められた。つまり、青年群では、退却的態度得点の高群は厳格性得点は低い傾向があるのに対し、成人群では、逆に退却的態度得点の高群は、厳格性得点も高い傾向があることが示された。相関分析の結果から、退却的態度と不快な気分状態との関わりは成人群において特に顕著であったため、成人期には退却的態度は不快な気分と結びつきやすいと考えられるが、青年期には成人期ほど不快な気分と結びつきやすい可能性がある。これらの退却的態度の特徴は青年期におけるアパシー心性の高さとともに、青年期から成人期への心的発達を考える上で重要な問題のように思われる。

目的③に関して、執着的態度については自己イメージとの関わり方に発達段階による顕著な差は見られなかった一方で、退却的態度の意味は青年期と成人期で異なっていることが示された。執着的態度に関する結果からは、青年期から成人期にかけての連続した側面が示されていると言える。また、退却的態度の現れ方や意味が発達段階によって異なるという結果から、退却的態度は執着的態度と異なり、青年期から成人期への移行に大きく関わっていると考えられる。青年期の方が、退却的態度に親和性が高いように見える結果であるが、これは、成人期になると社会的責任が大きくなることにより、退却的態度に対して許容できない姿勢が強まるためである可能性がある。このことに関するライフサイクル上の意味を考えるためにも、青年期と成人期以外の時期、例えば児童期、中年期、老年期について検討することにより青年期に始まる自己の再編成に関わる執着的態度や退却的態度の意味がより鮮明になろう。

本研究では、執着的態度と退却的態度という対極的な態度が、青年期と成人期においてどのようなあり方を示すかということの検討を行った。その結果いくつかの点で青年期と成人期の心性の違いが見えてきたように思われる。しかし、今回の研究は、発達のライフサイクルの中の小さな一部分に焦点を当てたものであるため、今後も様々な方向へ問題を広げてゆくことが必要である。

注・引用文献

- 1) Levinson, D.J.: The seasons of man's life, W.W. Norton, New York, 1978 (南博訳:『人生の四季』 講談社 1980)
- 2) 荒井真太郎:「執着のスタイルについて」,『京都大学教育学部紀要』 44号 1998 360-371頁
- 3) 飯田眞:「状況論」, 飯田眞編:『躁鬱病』 国際医書出版 1983 198-215頁
- 4) 下田光造:「躁鬱病の病前性格について」,『精神神経学雑誌』 45巻 1941 101-102頁
- 5) 平沢一:『軽症鬱病の臨床と予後』 医学書院 1966
- 6) 酒井克允:「うつ病者の理想と行為の全能」, 笠原嘉編:『躁うつ病の精神病理5』 弘文堂 1987 171-197頁
- 7) 笠原嘉:「うつ病の病前性格について」, 笠原嘉編:『躁うつ病の精神病理1』 弘文堂 1976 1-29頁
- 8) 笠原嘉:「退却神経症 withdrawal neurosis という新カテゴリーの登場」, 中井久夫, 他編:『思春期の精神病理と治療』 岩崎学術出版 1978 287-319頁
- 9) 佐藤哲哉:「逃避型抑うつおよび退却神経症の精神病理と発達史(その2) —病前性格の発達と成人の発達課題との関連—」, 笠原嘉編:『躁うつ病の精神病理5』 弘文堂 1987 55-86頁
- 10) 広瀬徹也:「『逃避型抑うつ』について」, 宮本忠雄編:『躁うつ病の精神病理2』 弘文堂 1977 61-86頁
- 11) 笠原嘉:『退却神経症』 講談社現代新書 1988
- 12) 前掲書 1)
- 13) Ausbel, D.P., Montemayor, P. & Svojiar, P.N.: Theory and Problems of Adolescent Development.(2nd ed.), Grune & Stratton, New York, 1977
- 14) 前掲書 2)
- 15) 大石勝代 1974:「大学生, 中学生および精神分裂病者における意味構造の比較」 『心理学研究』 45巻 1974 21-32頁
- 16) 前掲書 11)
- 17) Maslow, A.H. 1954 Motivation and personality, Harper & Brothers, New York, 1954
- 18) 前掲書 11)

Abstract:

This study explored the attitude of adherence and that of withdrawal, which appeared in the process of identity formation. Scales on adherence and withdrawal, and self-differential scale were administered to 199 subjects, 96 of whom were adolescent and 103 of whom were adult. The results were as follows: (a) In adolescents negative correlation between adherence and withdrawal was remarkable while in adults correlation between them was non significant. (b) Adolescents were higher than adults in the apathy factor score of withdrawal scale. (c) Adherence correlated to unpleasant mood and rigidity, on the other hand, withdrawal correlated to unpleasant mood, smallness and unstableness. (d) Because there were interactions between withdrawal and rigidity, and between withdrawal and potency, it was cleared that the meaning of withdrawal in adolescence was different from that in adulthood. These results explained an important aspect of personality development from the viewpoint of adherence and withdrawal.